

Title	<紹介>富田志津子著『播磨の俳人たち』
Author(s)	仲, 沙織
Citation	語文. 2010, 95, p. 65-65
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69165
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

富田志津子著『播磨の俳人たち』

仲 沙 織

本書は、近世期の東播磨の俳人たちの活動に関する論考を収録する。加古川・姫路・高砂・加西の地区ごとに分類された四章から成る構成をもち、播州の二大俳壇であった加古川の栗の本一門と姫路の風羅堂一門の活動を主軸として展開する。

「Ⅰ 加古川の俳諧」第一章「栗の本一門」では、創設者である松岡青蘿と、一門を支えた播州林田の三木家の人々や田中布舟などの門人達を中心に、俳壇の形成と発展について論じている。特に、京都の俳人と交流し、芭蕉その人を顕彰する青蘿の俳風と、彼の門人となった加古川の俳人たちがもつ俳諧中興運動に沸く京俳壇への志向との関連性について考察が行われている。

「Ⅱ 姫路の俳諧」第二章「風羅堂以前の様相」では、近世初期には京の貞門、元禄期には大坂の俳諧師との交流が行われ、姫路に独自の俳壇が形成される基盤が存在していたことが示される。第二章「風羅堂一門の形成と展開」では、元禄十五年（一七〇二）に来訪した芭蕉の直弟子である広瀬惟然の作風が、姫路の俳人たちの間で流行し、井上千山を中心とした俳壇を形成する役割を果たした経緯が論じられる。その後、千山の息子であり、芭蕉五十回忌に風羅堂を建立するなど多くの事業を行って風羅堂一門を盛り立てた寒瓜、芭蕉百回忌における第二次風羅堂建立に携

わった寒鳥・寒鴻・寒桐などの井上家の俳人たちを中心に、近代まで続いた風羅堂一門の事跡を追う。

「Ⅲ 高砂の俳諧」「Ⅳ 加西の俳諧」では、俳諧の盛んであった両地の文化的水準の高さを示し、それぞれの地域において栗の本一門、もしくは風羅堂一門に属した俳人たちについて言及する。また、栗の本一門と風羅堂一門の二大俳壇に属さない俳人たちについても、各章で詳細な考察がなされる。例えば、Ⅰの第二章では滝瓢水と大坂俳壇との繋がりを指摘し、晩年の伝記史料として重要な追善集『おそねはん』（宝暦十三年（一七六三）刊、姫路文学館蔵）を翻刻・紹介する。

著者は「あとがき」において、「栗の本や風羅堂を全国レベルで捉え、日本の俳諧史に位置づけられないだろうか」と述べる。この著者の姿勢は、播磨の俳人たちと京・大坂・江戸俳壇に属した俳人たちとの交流や、俳諧中興運動など全国状況との関連性に着目するという形で随所に表れている。一方で、著者は俳書や寺社へ奉納した前句附、碑文、遺物など多数の史料調査によって、当時の俳人たちの俳諧活動に迫っている。

このように、広い視野による考察と精緻な分析とを併せもつ本書は、播磨の俳諧史を明らかにするとともに、近世期における俳諧文化の豊かさも提示している。

（和泉書院、二〇一〇年一月、二八七頁、九四五〇円）

（なか・さおり 本学大学院博士前期課程）